

雁の棹

森岡 正作

煙もまた

悪知恵の方へ転がる胡桃の実
煙茸噴かせ踵を返しけり
蟪蛄の斧の錆びつく雨催
柚子挽ぐに棘の一撃喰らひけり
数珠玉の乾び音郷の減び音か
じよんからの泣き音に崩る雁の棹
父母に逢ふため天の川遡る

「青森支部発足記念大会」が盛会のうちに終了した。関東の方から参加した方々は久しぶりの遠出とあつて、前泊やら後泊やらと紅葉の季節を楽しんだ人も多かった。私も後泊組となり八人で観光タクシーに乗り、青森駅から太宰治の斜陽館へ、そして十三湖を回り竜飛岬へのルートを辿った。車内の雑談も楽しく弾んだが、夕光の津軽平野に薄らと柵引く煙を眺めては、「煙を見ると安らぐのね」とか「何かほっとするのよね」と、しばらくしんみりとした優しい気持ちに浸っている。

登四郎先生に「煙もまた黄落の景の一つとす」という御句がある。當時は消防法等も厳しくなく公園などの落葉焚かも知れないが、八甲田山の黄葉やみちのくの田仕舞の景色に触れた身には、先生の御句がいっそう親しく感じられるのである。